

年間第20主日の説教

金 大烈 神父 2009年8月16日(日)

《“ミサ”それはこの世で一番力強い祈り》

おはようございます。

昨日、私達はミサの中でマリア様の取り次ぎを求めましたよね。ロザリオの祈りの第一連は母であるマリア様に感謝すの心で、第二連は私達それぞれが持っている色々な心配や事柄が、願えば必ずマリア様の取り次ぎによって叶えられるという強い心を持って祈りましょうと、皆さんと共に唱えました。

皆様なりに色々な意向を持って祈ったのでしょ。私は何を祈ったと思いますか。私は“皆様の祈りが必ず叶えられるように”と祈りました。近いうちにその効果が出ると思いますので待ってみましょう。

今日は、ある物語を皆様に紹介させて頂きたいと思います。

あるところに山林監視員であったブラウンという人がいました。その人は久しぶりに山から下りて、友達であるトムという人を尋ねようとしてました。そのトムは肉屋を営んでいるので、その肉屋に行けばトムに会えると思い、その肉屋を訪れました。久しぶりに逢った2人は喜びのうちに、お互いの家族の事や近状を報告しながら挨拶を交わしました。その時、ドアが開いて、身なりのみすばらしい60代の女性が入って来ました。2人の話は中断され、店の主人であるトムは「いらしゃいませ」とその女性に言葉をかけました。しかし、その女性はなかなか話し出さず、時間が少し経ちました。そしてやっと「申し訳ございませんが、私はどうしても肉が欲しいのですが、買うお金がありません。もし宜しければ、この店のご主人の為にミサを捧げて来ますので、その代わりに肉を下さいませんか」という願いを話しました。しかし、トムもブラウンもカトリック信者ではありませんでしたので、みすばらしいその女性の姿を見て“この女は物乞いをする者に違いない”と軽蔑する心さえ抱きました。しかし、少しいたずら心が生じ、「分かりました。それではミサをきちんと捧げてからまた来なさい」とトムは答えました。

その女性は、直ぐに教会に行き、ミサ時間になるまで待ち、トムの為にそのミサを捧げました。そして、ミサが終わった後、司祭に「私はトムの為にミサを捧ました」と書いてもらい、その紙を持って肉屋に戻りました。そして、その紙をトムに見せながら、「私はあなたの為にミサを捧げました」と、先程の願いをもう一度しました。その姿を見て2人は少し腹が立ちました。“そんな事は出来ようもない。色々な人がいる者だ”とまた軽蔑する心が沸き上がりました。しかし、トムは「もういいよ、では、その紙がどの位か量ってみようか」と、その紙を受け取り、天秤ばかりの一方の皿にその紙をのせ、もう一方には意地悪をする気持ちで骨の一片をのせました。そうしたら、どうなると思いますか。骨の方が重いので、骨を置いた皿が傾きますよね。

しかし、その秤はびくりともしませんでした。2人は秤が壊れているに違いないと秤を調べてみましたが、異常はありませんでした。不思議に思いながらも、今度は皿に肉を入れてみました。それでも全然動きませんでした。「何だ、これは」と恐ろしささえ感じました。ブラウンは「大きな肉の塊をのせてみなさい」と言い、トムは店で一番大きな、何キロもある肉の塊を皿の上に置きました。しかしその秤は全然動きませんでした。それを見た2人は女性に頭を下げ、「ごめんなさい、私はいたずらをしてしまいました。私達はカトリック信者ではありませんが、これからは“信仰”とはどういうものか教会へ勉強しに行ってみます」。そして「必要な時はいつでも肉を求めに来なさい。私は喜んで差し上げます」と約束し、この話は終わります。

その後、2人は教会へ行き、熱心に勉強し、洗礼を受けました。特にブラウンは生き方が完全に変

わったそうです。ブラウンは毎日、雨が降っても、雪が降ってもミサがある限りミサに与り、そしてその熱心な信仰生活を送る姿を見て育ったブラウンの2人の息子は大人になって、一人はイエズス会の司祭に、もう一人はイエスの御心会の司祭になったという話です。

そしてブラウンはその時が来て、2人の司祭である息子呼び、遺言として「神様に召されるまで、本当に心を込めてミサを捧げて下さい。怠りによってミサを軽んじてしまわない様に。これが父としての最後の願いです」という言葉を残したそうです。

これはルクセンブルグのある街で実際に起こった出来事だという事を、私は耳にしました。私はこれが本当の話か、ただ単に、信仰心を燃やす為に誰かが創ったものかは分かりません。確かめた事はありません。しかしこの話を通して、私達がもう一度思い出さなければならぬ事は、この“ミサ”に対して、この様な気持ちで与っているのかどうかです。私は、私がこの太田教会を初めて訪れ、皆様に話した中で、「この世の中で一番力強い祈り、それは“ミサ”です」と何回も強調した事を憶えています。この話は、一過性の口から口へと語られる、単なる創り話かも知れません。しかし私は、この内容の重さや深さをいつも感じています。

皆様、ミサを本当に大事にして下さい。何よりも大事にして下さい。いつも繰り返し皆様に申し上げる事ですが、“いつも、いつも、このミサを通して、イエス様は私達の為に生け贄になっています”。“イエス様が捧げ物になっています”。

その様に、私達が想像出来ない、予想もつかない程の大きな神秘がこのミサで起こっている事を堅く信じましょう。皆様が意識出来なくても、想像出来なくても、このミサの大事さ、尊さを感じられる日が必ず来ると思います。その日が来る事を、来る日をただ待つのではなく、本当に心を込めてミサを大事にする心があれば、この“天秤ばかりの奇跡”ではなく、それ以上の奇跡が、皆様の心の中に起こると私は信じます。

今日これから、1人の方が洗礼を受け、5人の方が入門式を受けられるのですが、カトリックの不变の真理として、カトリックの全ての中心に“ご聖体”がおられます。ご聖体に対しての信仰が薄くなったり、鈍くなったりすると、その信仰は崩れます。今日『わたしは生きている、天から降って来たパンである』とイエス様はおっしゃいました(ヨハネ6・51-58)。その生きているパン、全然変わらないパン、その肉を私達はこのミサを通して頂くのです。ですから、その尊い肉を頂く私達も尊い者にならなくてはならないのです。実際、私達は生まれる前から、尊い存在としてこの世に遣わされています。その尊さをお互いに意識しながら、私達の信仰の生活をもっと力強く生きていきましょう。ミサは私達の信仰の全てが現れるところです。皆様、心を込めてこのミサに与りましょう。

ありがとうございました。